

【外題】

里見八犬傳 第三輯 卷一

【見返】

里見八犬傳第三輯

曲亭馬琴あらはす／柳川重信画

全五冊

書肆／山青堂

【序文】書下し

八犬傳第三集叙 「著作堂」

門前に狂狗有れば、其酒沽れず。而れども主人は睥まじらず。猶且つ酒の沽れざるを恨めり。痴情是の若き者。之を衆人と謂ふ。衆人に清濁有り。猶酒に醜と與と醜とと有るがごときなり。而して清める者は其の味淡薄。酔と雖醒易し。濁る者は其の味甘美にして。酩酊す。奚ぞ今を思ふ者之衆おほくして。後を懼るゝ者之寡すきや。是の故に。瞿曇氏法を説て以地獄果天堂樂有りと為す。是に於後を思はざる者懼る。又何ぞ耳を責ぶ者之衆して。目を賤めざる者之寡すきや。是の故に南華子物論を齋じうして以争訟を禁とめんと為す。是に於耳を責ひ目を賤む者愧つ。然れども彼の寂滅之教の若き。媚る者衆して。悟る者弥々寡すし。宜むなり。其媚る者は。口に經を誦すれども。其義を釋くこと能はず。其迷ふ者は。心に利益を禱れども。之を欲する所以を知らず。凡そ之の如き之禪兜。度すると雖其功有ること無し。昔者震旦に烏髪うはつの善智識有り。因を推し果を辨し。衆生を誘ふに俗談を以し。之を醒すに勸懲を以す。其意精巧。其文奇絶。乃ち方便を經とと為す。寓言を緯とと為す。是を以其の美錦繡の如し。其甘きこと飴蜜の如し。蒙昧蟻附して去ること能はず。既にして有る所之煩惱。化して屎溺しと為なり。遂に糞門を解脫するときは。則覺ず獎善之域に到り暫時無垢之人と為ると云ふ。亦奇ならずや。余少わかかりし自り愆て戲墨を事とす。然れども狗才馬尾を追て。於閭巷に老たり。唯其の勸懲に於。每編古人に譲らず。敢て婦幼をして獎善之域に到ら使んと欲す。嘗て著す所の八犬傳。亦其の一書なり。今其編を嗣こと三たびにして。刻且まに成らんとす。因て數行を簡端に題す。嗚呼狗兒の佛性。無を以字眼と為。人は則媚て其尾を掉るを愛す。我は則悞て帝堯を吠んことを懼る。冀くは賢者のために。煩惱狗を獵て以一條の迷路を開かん。閱する者幸に其無根を咎ること勿れ。

文政元年九月盡日

養笠漁隱 「馬琴」「乾坤一草亭」

【序文】原文

八犬傳第三集叙 「著作堂」

門前^ニ有^レ狂狗^一、其酒不^レ沽^レ。而^レ主人^ハ不^レ曉^サ。猶且^ツ恨^{メリ}酒之不^レ沽^レ。痴情若^キ是^ノ者、謂^フ之^ヲ衆人^一。衆人^ニ有^リ清濁^一。猶^ニ酒^ニ有^ル醜^ト與^レ醜^ト也。而^{シテ}清^者其味淡薄、雖^レ醉^ト易^シ醒。濁^者其味甘美^ニシテ。而^レ酩酊^ス矣。奚^ソ思^フ今^ヲ者之^ノ衆^一。懼^レ後^ヲ者之^ノ寡^也。是^ノ故^ニ。瞿曇氏說^テ法^ヲ以^テ爲^ス地獄果天堂樂^一。於^レ是^ニ不^レ思^レ後^ヲ者懼^ル矣。又何^ソ貴^フ耳^ヲ者之^ノ衆^一。不^レ賤^{シテ}目^ヲ者之^ノ寡^也。是^ノ故^ニ南華子齋^ニ物論^ヲ以^テ爲^ス禁^ニ爭訟^一。於^レ是^ニ貴^レ耳^ヲ賤^レ目^ヲ者愧^ツ矣。然^レ若^キ彼^ノ寂滅之^ノ教^一。媚^者衆^一。悟^者弥^ク寡^矣。宜^{ナリ}。其媚^者ハ。口^ニ誦^ス經^ヲ。而^レ不能^レ釋^ク其義^ヲ。其迷^フ者^ハ。心^ニ禱^シ利益^ヲ。而^レ不^レ知^ラ所^ニ以^テ欲^ス之^ヲ。凡^ソ如^キ之^ノ之禪兜。雖^レ度^ス無^シ有^ル其功^一。昔^者農旦^ニ有^リ烏髮^ノ善智識^一。推^因辨^シ果^ヲ。誘^ニ衆生^ヲ以^テ俗談^ヲ。醒^ス之^ヲ以^テ勸懲^ヲ。其意精巧。其文奇絶。乃^チ方便^ヲ爲^レ經^ト。寓言^ヲ爲^レ緯^ト。是^ヲ以^テ其^ノ美如^ク錦繡^一。其甘^キ如^ク飴蜜^一。蒙^昧蟻附^{シテ}不^レ能^レ去^ル焉。既^ニ而^レ所^レ有^ル之煩惱。化^{シテ}爲^レ尿溺^ト。遂^ニ解^ニ脱^ス糞門^一。則^レ不^レ覺^エ到^リ二獎善之域^一。暫時^ヲ爲^レ無垢之人^ト云^フ。不^ニ亦^奇乎哉。余自^レ少^カ愆^テ事^ニ戲墨^ヲ。然^レ狗才追^テ馬尾^一。老^ニ於^レ閭巷^一。唯^於其^ノ勸懲^一。每^編不^レ讓^ラ古人^一。敢^テ欲^ス使^ニ婦幼^{ラシテ}到^リ二獎善之域^一。嘗^テ所^レ著^ス八犬傳。亦^其一書也。今^嗣其^ノ編^ニ而^レ刻^ス且^成。因^テ題^ニ數行^ヲ於^レ簡端^一。嗚呼狗兒^ノ佛性。以^レ無^ク爲^レ字眼^ト。人^ハ則^レ愛^ス媚^テ掉^ニ其尾^一。我^ハ則^レ懼^ル悞^テ吠^ニ帝堯^一。冀^ハ爲^レ二賢者^一。猶^ニ煩惱狗^一以^テ開^ニ一條^ノ迷路^一。閱^ス者幸^ニ勿^レ咎^ル其無根^一。

文政元年九月盡日

箕笠漁隱「馬琴」二「乾坤一草亭」

【目録】

南總里見八犬傳第三輯摺目録

卷之壹 第二十一回

額藏間謀信乃を全す。 犬塚懷舊青梅を觀る。

同 卷 第二十二回

濱路竊に親族を悼む。 糠助病て其子を思ふ。

卷之貳 第二十三回

犬塚義遺託を諾く。 網乾漫に歌曲を賣る。

同 卷 第二十四回

軍木媒して荘官に説く。 暮六偽りて神宮に漁す。

卷之参 第二十五回

情を含みて濱路憂苦を訟ふ。 奸を告て額藏主家に還る。

同 卷 第二十六回

權を弄びて墨官婚夕を促す。 殺を示して頑父再離を着む。

卷之四 第二十七回

左母二郎夜新人を豪奪す。 寂寞道人見に圓塚に火定す。

同 卷 第二十八回

仇を罵て濱路節に死す。 族を認めて忠與故を譚る。

卷之五 第二十九回

雙玉を相換て額藏類を識る。 兩敵に相遇て義奴怨を報ふ。

同 卷 第三十回

芳流閣上に信乃血戦す。 坂東河原に見八勇を顕す。

統計三十回其第一回第二十回に迄ては既于前板の兩輯に録せり

【口絵】

犬山道節忠與

田單燕ヲ破ル之日ノ火平原ヲ燎クノ阿難寂ヲ示ス之年ノ煙兩扞ヲ和ク

劍術の極秘は風の柳かな

犬飼見八信道

酔もあらばいざぬたにせんノ網さかなえびとかにはのノ舩で味噌すれ

莊客糖助

大塚臺六

軒のつまにノあはひの貝のノ片おもひノもノ夜つられしノ雪のしたくさ

奴隸背介

簸上宮六

出像二頁浅倉伊八刻

大虚容實 創自鴻濛ノ渾沌未分 孰主人公

わがとしのゝぼるにつけてノはつかしきこと葉のちりやノ山となるらむ

乾坤一草亭のあるじ 信天翁題詠

【本文】

南總里見八犬傳第三輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第廿一回 額藏間諜信乃を全す
大塚懷舊青梅を觀る

却説大塚大川の両童子、信乃額藏は、送^{かたみ}に志を告^{つげ}、義を結びて、なほ久後を相譚ふ折、蹇然と足音して、外面より來るものありけり。信乃は耳を側^{みみ}て、目注^{めくは}をしてければ、額藏はやくこゝろを得^えて、おのが臥房に退きつゝ、衣引被^きぎて臥^ふす程に、片折戸に掛^かたりし、引板の鳴子を瓦落めかして、ニツニツ四ツつち咳^せぎ、「和子よ、宿所にをはする哉。糠助がまゐりたり。恙なきや」と呼^よ門つゝ、障子の破隙さし覗^{のぞ}き、支木朽^{つか}たる竹縁に、掛^かくる片髻片胡坐、背ざまに手をつきて、庭の新樹をながめてをり。

當下信乃は身を起して、やをら障子を引開^ひつゝ、「阿爺^{おぢ}、よくこそ來ましたれ。且^まこなたへ」と手箒を、把^たて塵芥を掃^はすれば、見かへりて頭をうち掉^ふり、「いな措^お給へ、土足なり。年々のことから、蜀魂鳥の啼^なきは、早稲も晚稲も種^{たね}浸^ひし、畑に水田と^いかへす、稼^{かせ}いとなく思はずに、いたく不沙汰をつかまつりぬ。莊官殿より隸^つられし、童男はいかにぞや」と問^とれて信乃は、後方を見かへり、「額藏はきのふより、心地わづらはしとてつち臥^ふたり。風^{かぜ}ひきたるにこそとおもひて、賣藥^{ばいやく}求めて勸^{すす}れども、早に差^さるべくもあらず」といふを糠助聞^きあへず、「そは困^こじ給^{たま}ふならん。母屋へいゆきて、よしを告^{つげ}、餘^よの人をこして替^からせん。さる事あらはきのふにも、などてしらせ給はざる。まだ十五にも足^たらぬとち、異^{こと}あらずともおほつかなきに、鬻^か僕^めが資^{かね}にならで、おん身に看^{かん}病^{びょう}されんとは、鬼^{おに}のやうなる小父小母御^{おやおぼ}でも、思^{おも}ひかけなきことなるべし。吾^{わが}所に任^{まか}し給^{たま}ひね」と獨^{ひとり}窓^{まど}圖^ず早^{はや}合^あ点^{てん}、驚^{おど}忽^{とつ}ながらの信^{しん}める、碎^{くだ}の端^は居^ゐおち著^つす、そがまゝ立^たて外面へ、忙^{いそ}しげに出^いにけり。

されば又^{また}蠶^さ六^む筆^{ひつ}篠^{せん}は、信乃が為^{ため}に朝夕の、薪^こ水^{すい}の事^{こと}を資^{かね}けよとて、小廝^{こま}額藏^{がくざう}を遣^{つか}しつ。人目^{ひとめ}はかりは三四日毎^{まい}に、飯^{いひ}のあはせ物^{もの}などを、小坏^{こま}に盛^もりて饋^くり遣^{つか}し、又^{また}みづからも音^{おと}つれて、門^{かど}より安否^{あんひ}を問^とふものから、その初^{はつ}こそ屢^{しばしば}したれ、素^{ただ}より愛^{あい}する心^{こころ}なければ、植^うつけ時^{とき}のいそがはしさに、その事はやうち忘れて、久^{ひさ}しく訪^{たず}ねせもせざりしに、この日^ひ糠助^{かすけ}が來^きて、云^いふと告^{つげ}しかば、龜^{かめ}篠^{せん}聞^きて

肩を擧め、「この比は人一個を、二人にしても使ひ足らぬに、心なしの丁兒奴が、風ひきたりといかばかりの、事やはある」と迂らせし、口を鉗めてうち微笑み、「よくこそ告て給はりし。ともかくもすべけれ」と応て糠助をかへしつゝ、驪て夫に相譚へば、臺六聞て、舌うち鳴らし、「是首と彼首は間近くとも、竈ふたつにしたればこそ、人手かゝりて不便なれ。けふより信乃を呼びとりて、養ふべくは思へども、童てこそあれ親に似て、偏屈児とおぼゆるに、中陰いまだ果されば承引べくもあらずかし。今曇時の程なれば、孰なりとも遣して、額藏奴と引かえ給へ。真美々々に款待ば、こなたに得の著ことなるに、厭ふことかは。よくし給へ」と耳語は點頭つゝ、一個の老僕を遣して、額藏と替すに、額藏ははや帰り來にけり。氣色を見るに異なることなし。やうこそあらめ、と筆篠は、あるじのほとりに呼び近づけ、「やをれ額藏、汝はきのふより病臥したり、と糠助男が告たれば、人暇なき折なれ共、そがまゝ措んはさすがにて、代の僕を遣せしに、見れば異なる氣色もあらず。総角どちの狎易く、相撲狂ふて肩腹たち、很て作病せしならん。嗚呼の白物かな」と疾視て、夫婦齋一敦圍は、額藏頼に手を推薦、「些頭痛はしつれども、うち臥までには候はず。とはかりまうさは横著せとて、ますゝ叱らせ給はなん。

某彼処へまゐりし日より、とにかく彼子はうち鮮給はず。水はわが汲む、汲すもあれ。炊も吾する、そがまゝ措ね、とよるじ禁て使れず。四月の天に垂籠て、目比をして日を消せば、困じ果て候ひし。さればとて、逃てかへらは叱られん。おもへば年來打懲して、使せ給ふ主の恩、今やうやくに目が覚ても、起甲斐なきに引被く、衣のつら見の夏風、獵竭したる虚の病の床は日ころより、母屋恋しき氣鬱の症。寔に九死一生涯の、智慧を出して呼かへされ、甦生りて候なり。田畑の稼、内外の使、なほ身に入れて仕らん。曇時なりとも大塚どのに、隸らるゝことばかり、免させ給へ」と掌を接て、真しやかに賄話にけり。あるじ夫婦はつくゝと、聞つゝ笑て、送に見かへり、「亀篠いかに思ひ給ふ。此奴も等しき童なるに、信乃がとにかく心をおきて、出てゆけがしにもてなせしは、そのよしなしといふべからず。云々の事あらば、竊にこなたへ告はせて、假病して臥ことやはある。そが一生の智慧ならば、鐵錢三文の直うちもなし。こな戲家奴」と罵れば、亀篠ほゞとうち笑ひ、「さはこれのみ叱せ給ふな。信乃はなほ総角なれども、心ざまは老つけて、殊に執念、腹きたなく、さる筋のあるものと見き。やよ額藏、よしや氣に入れられず共、日来彼処にをりしかひに、聞つる事はなかりし歎。信乃はこなたをいといたう、怨みてあらん、さもなき歎。様子を告よ。いかにぞや」と仁顔して問落す、梓の弦にあらねども、水向られて、虚とは憑らず。「吾、目今もまうせし如く、適物をいひかけても、生恋のみせられしかば、聞たることは候

はず。然れども今は伯母御の外に、よるべき人なれば、いかでかこなたをうらみ給はん。初には似す慕しく、思はるゝ事疑ひなし。只某に強面きは、過世の讐歎。さもなくては、氣質のあはざるにもあらん。身にとりて憎るゝ事とて覚候はず」といへば、暮六つち顔き、「假染の主従にも、五性の相剋ありとかいへば、さる事なしといひ難けれども、假病せしは不覚なり。信と懲すべく思へども、此度は枉て許すなり。よにいそがはしき折なるに、両三人が事をもして、その忿を貫すはその度に辛きめ見せん、立ね〜」といそがせは、額藏頻りに頼つきて、庖厨のかたへ退きけり。亀篠雲時目送りて、「わが伏は何と聞給ひし。人の氣質はさまざまなり。総角は總角どち、よき友也と歡びて、使れもせん、使ひもせん、と思ふには似ず額藏が、信乃に鬱悒せられしは一日二日の事ならず。かゝればいたく怨るゝ、悪口を利たる歎。然らずは氣質の合ざるならん。さはおぼさずや」と耳語は、暮六頭を傾けて、「否そのみに限るべからず。信乃はこなたをなほ疑ひて額藏を誅たるは、隱監ならん歎とて、心放さぬ事もありなん。必しも悔るべからず。額藏が代りには、誰を遣したまひたる」「誰とて早の事なれば、背介にいけとて遣し侍り。渠は齡も六十にあまりて、人なみには得働かず。膝此ころは、三里の交を爛して、起居も不自由なり。額藏と引替て、損なきものに侍らずや」といへばしば〜うち點頭、「微妙計り給ひにき。しからんには一両日、遠くは四五日、程を歴て、竊に背助を招きよせ、渠にも信乃が心をおくや、事のやうを問給入。渠にも心をおくならば、吾侪夫婦を疑ふ也。又額藏をのみ嫌ひて、背助を厭ふことなくは、丁児一人がうへにして、こなたを疑ふ故にはあらず。事の虚実を撈りて後に、計策はなほあるべし。こゝろ得給へ」と額を合して、相譚果て起にけり。

さて両三日経にければ、亀篠は、みづから信乃が宿所へいゆきて、さり氣なく安否を問、事の為体を窺ふに、信乃は背介を厭ふことなく、背介も亦真成に、進止すといふことなし。亀篠、曾に物あれば、なほ四表八表の物がたりに時を移して、今はかうと思ひしかば、告別してかへり來つ。此とき夫は納戸にをり、折こそよけれ、とほとりにいゆきて、「曩には背介を呼びよせて、竊に問へ、と言ひしかど、信乃が疑ふこともや、と思ひにければ吾侪いゆきて、喪中の安否を問がてら、半日あまり彼処にをり、残る隈なく見究め侍り。その為体は如此々々也、箇様々々」と潜やかに、告れば暮六且く尋思し、「さりとて信乃が心さま、凡庸の少年ならねば、虎と肌膚を見せかたし。まづ額藏を召近つけて、箇様々々にこしらへ給へ。その事成らば、云云なり。かくの如く計んには、後悔する事あるべからず。氣色に晝られ給ふな」と言おちもなく説示せば、亀篠只管歎賞し、「現針は細小でも、得吞れずといふ諺は、そこらの事に侍りなん。寔に心違しげなる、少年

なれば用心に、なほ用心をするこそよけれ」としのびくりに相譚ふ折、竹縁を踏鳴らして、障子のあなたを過るものあり。亀篠はいちはやく、「そは額藏にあらずや」と問へば、「さなり」と答たり。「竊にいふべきことこそあれ、こなたへ入れ」と呼び止られて、やをら障子を推開つゝ、顔さし入れてついゐたるを、「其処引開て、こなたへ来よ」と勝のほとりへ招きよせ、「かう打揃ひて物々しく、いふべき事にはあらねども、折のよければ告る也。信乃は正しく任なれども、番作が儼たる、心の鬼を譲り受たる、渠が氣質は汝もしれり。飽までに怒む、伯母を不足に思はずは、そが為にとて遣せし、人嫌ひすることはあらじ。さらずは汝が口さがなくて、思はず信乃に腹たせ恨みられたる事あらん。そはとまれかくもあれ、世間舅姑の鬻じさに、よきもわるきも彼子のうへは、わが口つからいひがたし。この故に只氣を受けて、揚足とられぬ用心を、する外にすべはなきぞとよ。汝は六ツか七歳より、生涯使ふ小厮なれば、任にもましておぼゆるかし。養育し主の恩大かたならずとするならば、よしや強面くもてなすとも、終には信乃に馴近づきて、聞くことあらば竊に告よ。そは苟且の事ならず。信乃をこなたへ呼びとりて、養ふ月日は限りしられず、未いと遙き事なれば、今いふよしを小耳に挟みて、念じて主の為になれ。よにそれ程の利生はあらんこころ得たりや」とこしらゆれば、暮六は鬻抜かけし、鑊子を拭ふて頭撞拵、「額藏、汝は果報あり。任にもまして憑しく、思はずはいかにして、亀篠が此機密を告ぐき。かくれば汝を遣して亦復背介とかはらせん。しばしの程ぞ辛防せよ」といへば額藏小膝を捺り、「かくまで思はれ奉る御恩をいかでか仇にして、いはれし事を忘るべき。前日私語まつせしごとく、大塚どのはこなたより、外によるべのなき人なれば、野心あるべくもあらねど、ともかくもして馴近づき、おん為わるき事などを、聞かば竊に告申さん。これらの事は御こころやすく、思召れよ」と真たちて、回答をすれば、主夫婦は、いよゝ言葉を甘くして、賺すをしりつゝ賺されて、又彼背介に替らんとて、立んとすれば、亀篠は、遽しく推禁め、「童どちでも背あはせし、彼子の宿所へ独ゆかんは、今ならに、面ぶせならん。吾侪が後に跟て来よ」といひつゝ躄て身を起して、かき合せたる衣の前、うしろ結びの帯の端、推拵ながら竹縁に、出れば額藏をり立て、板金剛を取すえたり。亀篠裳を引揚て、納戸の方を見かへりつゝ、「ちよと往て還り侍らん」といふに夫は顔くのみ。冠はぶらぬ苗芋の親に劣らぬ任の宿、背戸の島の嵯傳ひ、捷徑よりぞ進みける。

かくて亀篠は信乃が宿所へ赴きて、常にもあらずうちほく笑み、「信乃よ、さこそは徒然ならぬ。所要なければ得も訪はず。きのふけふの歩が親さに、何しに来つると思はれん。けふは別の議にも侍らず。この額藏が事也かし。情由はしらねど機嫌に停ふて、使ふことのなければ、虚病起して

還りし、と明々地に人に告るを、聞ては伯母がこゝろも濟す。よしや昔は疎くとも、今は親き佳なり伯母なり。小廝に水を煮れつゝ、飯の中なる湯麥、奥歯に物が夾りては、心かゝりに侍るかし。墓六どのも腹立て、額藏をいといたう、叱懲らし玉ひしかば、渠は忽地非を悔て、勸解してたぐとうち泣にぎ。よりて再び將て来たり。心つきなき事のみなめれど、足らぬ処は云云と教諭して使れんは、渠が為に幸ひ也。伯母も勸びこのうへなし。こゝへ出よと見かへれば、額藏愧たる面色して、頭を掻ぎつゝ小膝を勧め、「今阿家さまの言ぶごとく、心に物のあるにあらねど、朝の炊もさせ給はず、墨つきわるき鍋の尻、用なく居て置れし故に、頭顱病して候ひき。それも己が愚なる、僻こゝろに候はん。許させ給へ」と勸解にけり。これらのよしは豫てより、謀し合せし事なれば、信乃は此彼聞あへず、うち驚きたる面色して、「こは思ひかけもなき、勸解るゝよしあらんや。親の在かりし日より、薪水の事にはわれも熟たり。資の人はあらでとも、思ひおもはず疎々しく、もてなしたるか、それすら寛す。かゝる事より母屋御夫婦、御こゝろにかけられんは、皆是おのが罪にこそ。疎意あるべくも候はず」といふに、額藏つち笑て、「しからんにはおぢるたり。中直りせし事なれば、額藏を留おきて、背介をば返したまへ。これに

【挿絵】「額藏を將て、龜篠大塚が宿所に到る」「がく蔵」「かめざん」「せ介」「ぬか介」「しの」「就ても亡人の、忌果るまで二軒の、家を隔て俟あかさば、よろづ不便に侍るかし。願ふは五七の忌日限りに、おん身を母屋へ頼むとらば、後やすく侍りなん。墓六どのも初より、しかせまほしく思ひ給へど、おん身が心を汲かねて、月日のたつを待こそ。いぬるは否哉、いかにぞや」と問れて信乃は嘆息し、「白屋ながら住なれし、親を思へば今更に、離れがたくは侍れども、四十九日も別れはおなじ。百日をるともその期にならば、なほ去がたく侍るべし。おのが心の隨にして物を思はせ奉らば、日を過すほど罪ふかゝり。ともかくも計ひ給へ。仰に侍り候はじ」と諭く諾ひしかば、龜篠ふかく歡びて、「吁賢々々、聞わけたりな、よき子ぞや。然らば五七の速夜には隣き里人を招きよせて、佛の為に物を態進ひ、その次の日に戸を鎖て、おん身は母屋へ移り給へ。詞敵にならずとも、女兒濱路も侍るかし。渠をばおん身が妹とも、お上さまとも見給ひぬ」といひつゝ、独うち笑へば、信乃は呆れて応せず。龜篠いよく機嫌よく、指儂へてうち點頭、「なき人の三十五日は、けふより僅に四日が程なり。墓六どのにも歡せ、翌より速夜の準備せん。さらば吾儕は罷るべし。額藏よ、毎事に、こゝろを付てよく仕入よ。いはれしことを忘るゝな。信乃もよろづに心くまなく、火なれ水なれ使ひ給へ。最上の川に曳といふ、いな舟漕がば乗し蒐て、打懲すともけしうは思はず。彼背介奴は背門にやをる。額藏を將て来つれば、おのれは供して母屋へ還れ。をら

すやいかに「と呼立れば、」こゝに侍り、「と庖温なる、障子をやをり引開れば、」こな男が落著兒なる。其処をりつゝ鈍まじや、門へ出「や」といそがして、そがまゝ立つを止めあへず、信乃はいそしく席を避へ、「日はいと長く侍るなる、今且く語せ給へ。餌の素湯も沸侍る」といへば頭をうち掉て、「茶をたつてをる間は侍りず。曲突下の麴柴、麥の出納、片响をらねは損刃かり。又こそ来め」といひかけて、出るを送る信乃額藏、腹にかえつゝ出てゆく。背介は縁に手を突て、信乃に別を黄楊樹の、刈込伸し庭を出る、主の老女に引そふたり。

且して額藏は、外面へ立出て、母屋のかたをうち眺め、左辺右邊を見かへりつゝ、片折戸を楚と閉、舊の処に對坐りて、莊官夫婦にいはれし事、又わがいひつる事の趣、竊に信乃に告るになん。信乃は頻に嘆息し、「親の為に中わらくとも、異母の姉なり。又わが為にも只一人の、伯母とおもへば今さらば、蓬ざ心あるへしやは。さるをとにかく疑ひて、讐敵の如おもはれては、長き月日をいかにして、彼方をまに送らるへき。意に進退究りぬ」といひかけて又嘆息す。額藏これを慰めて、「さればこそ其事なれ。伯母御夫婦は慾のみなり。只利の為に骨肉の愛を忘るゝ情を知らば、邪氣を避るに何かあらん。われ又おん身が影に添ふ、返問の謀、その續は釋懸おきし。かゝれば只いつまでも、おん身と吾儕は恥じからず、その志めはさるもの、と思はるゝにますことなし。さるときは某が、いふ事毎に信用せられん。九石の弓も張ること、久しければ弛むといはずや。彼人々に害心ありとも、おん身が心の信もて、柔よく剛を受給はゞ、伯母御が邪慳の角折れて、終には慈母となることあらん。よしや其処までならずとも、彼方さまに身を投掛て、そのせんやうを見給へかし。こゝにて物を思ふとも、その期の役にはたちかたし。心陟」と諫れば、信乃は忽地感悟して、おもはずも莞尔と笑み、「人の才には長短あり。われ只一歳の弟なれども、おん身に及ばざる事遠かり。伯母にこの身を寄すること、原是親の遺言なれば、吉凶は只運に任せん。馳て母屋に移りては、膝を合して復心を、相語ことは難かるべし。なほ後々の事までも教あらば示し給へ」といへば額藏頭を拊、「わが才、おん身に及ねども、俗にいふ岡見八目也。素より智囊富給へは、機に臨み変に應じて、禍を避給へ。われ又竊に盾となりて、笑の中なる刃を禦ん。努秘すべし」と密語つ、示し合する思慮遠謀、現一双の賢童なり。

さる程に、番作が、三十五日の速夜になりつ。龜篠等はきのふより、羹に膾の用意して、碗家具さへに母屋より、運ぶ小廝が幾戻り、寔に足は播棒も、出て働く臺所、物入かたに整へば、はや黄昏になりけり。

この日も信乃は亡親の、墓参りせし叙に、菩提院なる法師を伴ひ、遽しく立かへれば、法師は

家廟にうち對ひ、木魚敲きて看經も、一ト口茄子で澄汁、料供の菜を數へてをり。

浩処に糖助等、里人夥詣来つゝ、寒暖の時宜口諺、或はなき人の事いひ出て、「昨けふのやうなりし、三十五日に當りたまふ哉。無常迅速、はやいものなり。思へば浮世は夢助どの、孰もお話なされずや」「然らば御免、さりながら、あまり上座で不駈千萬」「切々遠慮に及ばぬ事、お手を取ふ哉」「これは迷惑。鎌平ぬしはお年役」「さ言ひな、六十の薙破りといふことあり。鐵柄把ても若衆に、一ト一ト敵と後るゝことにはあらず。仏には別懇なりし、糖助どのこそ上客なれ。お坐をなされ」と起し届つ。謙退辞讓散動きて、稍一側に坐を占れば、信乃が手つから並居る。飯に中酒に、挨拶紛紜、由断を見済し額藏が、碗を奪ふて浮盛は、鼻に支へて又胸に、支ぬ為にと汁被て半減して息を吻く。下戸の恨みを冷笑ふ、宗旨違の上戸客、法師を上坐に六歌仙、歌膝崩して鬘々たり。時分を計りて鬘六は、縁類より遠り来て、上座の障子推ひらき、「孰も揃ふて、よく來ませし。進らするものはなけれど、寢きて相譚給へ」といひつゝ進みて席に著き、手首入れて引伸す、袴の襷も菱織の、いと々稜ある主態に、衆皆齊一着を揃「思ひかけなき御覽應、鎧武者にはあらねども、屈伸すら不自由に、額くくこのならぬまで、下されて候」と一人がいへば、皆咄と、笑ひに堪ず、噴散す、飯粒膳に花雪吹。これは、とはかりに、拾ふに餘る粒々辛苦。背門の雀がまだ宿すは、助てくれよと啣ちけり。

かゝりけれ共鬘六は、苦切て見もかへらず。且してきていふやう、「各位にしろると如く、わが妻は舊の地頭、大塚匠作ぬしの嫡女にて、番作が姉なるに、嘉吉の結城合戦に、その家一旦滅亡して、子孫民間に落て後、再興せしは龜篠が、縁に繋るわが功也。こはいはでものことながら、死せりと聞し、番作が、妻を將て還りしかば、いかで所領を引わけて、莊官さへに譲らん、と思ふ甲斐なき寔人、身の不自由に心さへ、直からねばや、訪ひも來ず。姉を恨めば、われをばなほ、讐敵の如罵るのみ。生涯物をいはざりしを、心うつとは思ひしかど、有繫に役義重ければ、こなたより手をさげて、勸解するよしのあらずかし。しかるに各位渠を憐み、構を結びて錢を集め、家を購ひ、田園を、隸て生涯養れしは、舊をおもふ義なり信なり。われ口へこそ出していはね。酸鼻まで辱く、年来感嘆浅からず。しか思ひつゝ各位に、口誼を述べは役義のかなしき、些しは推量せられよかし。これは是過にし事、彼偏意地を立とほして、墓なくなりし番作が、黄泉の迷ひはし乃のみならん。この狐を養ひとりて、人となさずは先祖へ不孝、われ亦人といはれんや。よりて龜篠と相譚つゝ、渠が親の果にし日より、小廝等を册せ、送代に夫婦をり、歩を運び、心を添て、五七の速夜のけふが日まで、等閑にせざる事は、各位も知てぞあらん。しかはあれども十

五にも、足らざる俵をいつまでか、手はなちてこゝに置へき。翌は母屋へ迎へとりて、適丈夫に
守育、女兒濱路を妻はして、大塚氏の世嗣とすべし。就ては彼番作田は、各位に返さん哉。又信乃
に與ん哉」と問は衆皆頭を擡、「そは官はするまでもあらず。親の物は子に譲る、貴賤上下の差別
なし。件の田園の主といふは、こゝの息子の外になし。吾們がなんでふすべし。よきに計せ給ひ
ね」といふに臺六つち笑て、「しからは信乃が成長るまで、沽券は某領かる也。又この家は床を
拂ふて、彼番作田の稲城とせん。各々兼知せられよ」と信めかしておのが田へ、引くとはしるや
水飲百姓、顔見あはして応難れば、庖温のかたより龜篠は、相槌撃んと進み入りて、信乃がほと
りに推並び、「けふの公はとまれかくまれ、この子は吾儕が婿なり子なり。子を拳ぬものは人の子
を、養ふてすら慈むに、缺替のなき怪に譲る、田園役義もあるものを、彼番作田を何にかせん。
信乃も如此こゝろ得給へ。翌よりしてわが宿の、籠の下の灰までも、果はおん身が物なりかし。憎
しと思ひし弟でも、今かうなりては最惜きに、東を見ても、西見ても、伯母より外に親類なき、こ
の子の久後想像れば、襦袢の中より乎みし、濱路にまして不便也。可愛くはべり」といひかけて
頻りに拭ふ袖の雨、降るとは見えて濡さりけり。龜篠に泣立られて、諸鼻うちかむ里人等、思は
ず斉一嘆息し、「意に親は憂苦會にて、人の誠を今ぞ知る。伯母君の述懐は、速夜の追善この上な
し。番作との御子息を、婿がねにと宣するを、一郷の人大かた聞り。かくては何でふ疑ふべき。
件の田園は莊官大人、且く管領せられん事、勿論に候」と異口同音に応しかば、臺六龜篠歡び
て、汁の冷たるを盛かえさせ、盃を勤め、飯を浮ひて、款待はじめに弥ましたり。

かくてその夜、初更の比、饗膳やちやく果しかば、法師は布施の二杖頭、臍のあたりへへし込
て、立尻に跟く莊客們、皆謝辞を述竭し、漸々に出る門廻向、紙燭も法の燈火と、後れ先たつ一
口念仏、南無阿弥反敵で輾るなど、上戸を扶てかへり去。迹はさながら大風の、凧たる如く蕭やか
に、洗ひ浄めて拭ひ納るゝ、五器の音のみ聞えけり。

かくてその詰朝、信乃は亡父母の、臺に香花手向んとて、菩提院へ赴きしに、還るをまたで臺六
夫婦は、小廝等を駈立て、犬塚が家の調度を取運せ、籠下の物、席薦戸障は、物大かたに沽却て
はやく空房にしたりけり。信乃はかうともしらずして、わが宿近くかへり来る、道次に立在もの
あり。と見れば是額藏なり。裳を高く端折揚て、糾袷さへ精悍しく、煤に汚れし額の汗を、推拭ひ
たる為体、こゝろ得かたく思ふになん。「こは何事をしつるに哉」と問つゝ走り近づけは、額藏後方
を見かへりて、「今朝もおん身が出給ひてより、まだいく程もあらざるに、莊官殿が人を將て來
て、宿所の調度を取運せ、或は沽却などせられしかば、吾儕も夫役に駈とられて、見給へ、歳暮に

煤掃如く、手も足もかくの如し。今やうやくに事果たり。腹は立んが堪忍びて、直に母屋へ赴き給へ」といはれて信乃は呆れ果、「かねて寛期の事なれ共、親の五七の忌日なる、けふ一ち日を過すとも、まだ遅からぬ事なるに、かう急れしは衆人の、変をおそるゝものなるへし。長物かたり、人もやしらん。疾ゆき給へ」と先に立して、徐に進むわが宿を、見過しかたく立よれば、外の垣根に異ならぬ、杜仲折られし庭面に、いることかたき門の鎖、さすが名残の惜ければ、誰は留ねど愀然と、且く其処に立在つ。彼と四郎を埋めたる、梅樹のほとりを見ても、只愛惜の袂露けし。「いでや渠が為にしも、卒都婆を建ん」とひとりこちて、短刀に著たる刀子を抜とり、梅の幹を推削りて、墨斗の筆を抜出し、「如是畜生發菩提心、南無阿彌陀佛」と写しつけて、筆を納て、仏名を十遍ばかり唱たり。

さてあるべきにあらざれば、そがまゝ伯母の宿所に到れば、暮六筆篠待つて、「呬、信乃坎、はやかりし、疾こなたへ」と招きよせ、「そなたが寺より罷りて後、とり拂んと思ひしかども、さでは一ト日に物方著す。惣におん身に見せては、歎き彌ますこともや、と心いそぎのせられし隨に、舊の宿所を空拂して、家厩はこなたと一処にしたり。けふよりこゝはおん身が家也。昨夕もいひつる事ながら、おん身が廿歳にならん比、濱路を妻して二代の莊官、我等は背門へ隠居して左圍で消す日を、いと待わびしく思ふのみ。濱路々々」と呼立て、夫婦が間に推すえつ。「まだ熟やかに物いはせねど、間近くをれば相識の、信乃はそなたと従兄弟、けふよりこちの子にしたり。大きくなりてはそなたの良人、等く背丈引伸して、はやく夫婦にして見たし。睦しくし給へ」と説示されて恥じろむ、濱路はをさな友衛、堪すやそが佞衝と立て、屏風のうらに躲れけり。信乃はよろづに由断せず、甘き言葉はわが身の毒とおもへば絶て耳にもかけず、殆困じ果てをり。亀篠これを誘引立て、西面なる一室に赴き、「こゝをおん身が子舎にせん。読書手習怠り給ふな。所要あらば額藏まれ、濱路まれ使ひ給へ。遠慮ふかきも処による。いつまで坎うひゝしき。うち鮮給へ」と慰めて、他事もなげにぞ管待ける。

かくて三伏の夏過て、秋の初風たつ比に、信乃は親の忌は果たり。これより先に亀篠は、信乃が女服なるを、男衣に縫更め、この日、城垣厩に参らするに、年は尚十一なれども、人なみに倍す身長なれば、十四五歳の童と見ゆめり。「けふ祝ぎの赤飯序に、額の隅を取らし給へ」と豫て夫に勧めしかば、暮六これに従ひて、元服の儀をとり行ひ、よに疎略なく見えしかば、年来憎みし里人等は、この老狸に欺れて、いと憑しくおもひけり。これらの事も信乃は只、そがいふ隨に悖はず。女服を更めて、凡常に従ふ事は、父番作が遺訓に稱へば、親の明察、忝く、思ふにつけて

形なき、身の久後を定めかねたる。

けふと暮れ、翌と明せば、いと今茲を果敢なく送りて、次の年の春三月、俟とはなしに亡親の一周忌を迎へしかば、連夜には家牖に籠りて、父母の冥福を祈るの外なし。明日信乃が墓参りの從者には、亀蓀豫て分付て、額藏を遣したれども、外の聞を憚れば、通途とて物かたりせず。寺へ詣て共侶に、その臺を洗淨め、水を汲み入れ、花を手向て、主從廻向に時を移せば、涙ぞいと進みける。かくてそのかへるさに、宿所近くなるまんに、信乃はわが舊毛の棟をつくくうち眺望「遠くもあらぬ程なれども、一トたび住すなりてはや、暮月に隣りたり。かはらぬ物は八重葎、庭の草木を見てゆかん」とて、傾頹れし片折戸を、推て主從進み入る。檐に昔をしのぶ草、柱斜に墜落て、藁の外に物もあらず。現人去て趾のみあり。物変りて訪ふに由なし。これすら涙の媒なるに、去歳のその月与四郎が、後の世の為、幹を削て、「如是畜生三云」の、經文を書つけたる梅は殊更茂りつゝ、その削痕は瘰、文字は滅て、青梅子夥生にけり。「この梅樹の下に埋し、彼狗が肥になりし歎。この花薄紅梅なれば、子の麝ことは稀なりしに、枝毎に斯締りしは、これぞ今茲がはじめなる。彼見給へ」と指させば、額藏もすゝみ寄りて、つくくとうち瞻め、「呖めでた。この梅は、その條毎に八つゝ生りぬ。世に八房の梅といふもの、ありとは聞と早にも見えりき。こは八房に候はん」といはれて信乃は心つき、「寔にこれは八房也。わが物こゝろを知る比より、斯條毎に八生ることは、聞も傳へぬことなりかし。畜生ながら主を知る、彼与四郎が名にし肩はゞ、四房にこそ生るべきに、八房なるはいかにぞや」といひかけて又と見かう見て、「奇なるかな。こは八房なるのみにあらず。見給へ、實毎に模様あり。何にか似たる」と枝引よせて、その実を取て共侶に、掌に乗せ、日影に向ひて、見れば自然と文字あり。「一箇は仁、一箇は義。この他、礼智の文字あり。又、忠信孝悌の四个字あり。その実毎に一字つゝ、顯然として読れたり。こゝに至て而賢童は、毛骨疎まで驚嘆し、幹を削りて写つけし、「如是畜生三云」の、八の文字は消滅て、今又その実に仁義礼智、八行の文字あり。こはくゝいかに、とはかりに、なほ疑ひは釋ざりけり。且して額藏は、膚護の囊なる、秘藏の玉を取出し、「若子これを見給へかし。梅の実と【挿絵】「青梅か香は亦花にまさりけりノ巴克亭鷄忠」「犬川がく蔵」「犬塚信乃」

この玉と、その形相似たり。その文字も異ならず。こは故あるべき事なれども、曉りかたく候といふに有理、とわれも亦、護身囊に秘おきし、玉をとう出てあはせ見るに、その小大も、文字も等し。「寔に然なり、因歎、果歎。玉といひ、梅といひ、符節をあはせてますゝ奇也。試みに推ときは、この玉、原は八顆ありて、仁義八行の文字を具足したるにや。しからは遣れる六の玉

世になしといふべからず。この梅糸ぞ八房に生たる。この玉と、この梅子に、顕れたる文字何ぞ等
き。問へども草木非常なり。叩けども玉石答す。必しも因縁あらば、後に思ひあはせんのみ。
人は只奇を好むもの也。人おのづからしらは知れ。われからこれを告べからず。努秘すべし〜」
と密語あふて、その八房の梅子を、紙に捻りて玉もろ共々、各囊に詰めつゝ、荒たる庭を走り
出て、懸て宿所に還りけり。

されはその年皐月の比、件の梅の熟せしとき、羸六が家の小廝等はさらなり、近き里人等は、は
じめてその八房なるを見著つゝ、世にめづらかなることなりとて、あるじ夫婦に告るもあり。又彼此
に語りつぎて、風聞高くなるものから、その梅熟するに及びては、彼八行の文字は滅たり。この
故に里人等は、只八房を賞するのみ、文字の事はするものあらず。是よりして毎歳に、その実は
八宛生けれども、文字はこの春のみにして、後には竟に顕れず。されば羸六羸條は、これらのよし
を聞といへども、風雅のうへに疎ければ、花果の樂を念とせず。只彼梅子の尋かるを歡びつゝ、
年々に塩藏にして、酒食の菜に充るのみ。この梅漸々に人に知られて、名木になりしかば、与四郎
が事さえ聞えて、八房の梅、与四郎塚とて、故老の口碑に傳へたれども、後年數度の兵火に係り
て、梅は枯れ、塚は鋤れて、今はその蹟も得認す、只彼猫又橋のみ遺れり。